

【本文】

ぶつちふしぎ
仏智不思議をうたがひて

ぜんぽんとくほん
善 本徳 本をたのむひと

へんじけまん
辺地懈怠にうまるれば

だいじだいひ
大慈大悲はえざりけり

【意識】

阿弥陀様のお心は、人には捉えきれない程の奥行きがあります。しかし、そのお心を敢えて抛り所とせず、

自分を抛り所として、自分の心と判断の範囲内で仏道を歩む人は、

阿弥陀様の極楽浄土から外れたところにおもむくことでしよう。

その人は、結果として阿弥陀様のお心、大慈悲のお心を聞き受けることが出来ないのです。

【私の味わい】

『一つの花』(今西佑行著)に、戦時中の食料不足の中で、「一つだけちようだい」と言う少女が描かれています。物のない中でも、「一つだけ」お母さんがおかずなどを余分にしてくれることを少女は知っていました。ある日、お父さんが出征することとなり、駅に向かう道中で少女はまた「一つだけ」と言います。お父さんは握り飯を渡すのですが、全部食べてしまいます。駅に着くと、また少女は同じことを言いました。すると、何も渡すものが無くなったお父さんは空き地に咲いていたコスモスを、一輪手にとって少女に渡します。終戦になっても、お父さんは帰ってきませんでしたが、母となったかつての少女の家の周りには一面のコスモスが咲いていた、というお話でした。

このお話を私なりに読めば、父の子へ向けた愛情物語と読めます。一方、小学生がこれを読んだ時は、違う解釈をする事もあるようです。「欲張りな少女に食べ物ではないものを与えて罰を与えた」、「これ売ってお金にしてきなさいと教えた」等です。その

背景には読解力や、家庭で日頃触れているものなどの事情もあるかもしれませぬ。

片や、仏教おいてはどうでしょう。阿弥陀様は大慈悲を以て一人一人を母が子を思うように救わんとされます。しかし、その仏様を罰を与える方、お願いしたら私の都合を都合通りに通してくださるお方と受け止めているならどうでしょうか。

私にとっての仏教、浄土真宗は、阿弥陀様が私を救おうとされるストレートな物語です。このことは、お経、法話を通してこそ知ることが出来るのです (悠水)